



浅虫森林公園

主信政が、眼の病をこの薬師堂に祈願して治したといひます。夢から覚めると治っていたというので、「夢宅」と書いた額を奉納しました。12俵の祿を与えて、藩主の祈願所となります。元禄6年(1693)、青森の曹洞宗青森山常光寺(一番寺)の4世住職・雲峯が、薬師堂を末庵として「夢宅庵」としました。このとき、津軽屋市左衛門が観音像を寄進しています。これ以来、夢宅庵は観音霊場となり、寛延年中(1748~51)に津軽三十三所観音札所巡りの23番に加えられています。「寛延巡礼記」に「堂二間に三間、本尊は薬師如来」とあります。



浅虫八幡宮 7

久栗坂の稲荷神社から山越えてきた奥州街道は、浅虫の八幡宮へ抜けてきます。

陸奥湾展望所 8



陸奥湾に浮かぶ湯の島、浅虫の街並み、遥か向こうに下北半島、天気の良い日には北海道まで見渡せます。かつて弘前藩主も浅虫の本陣に滞在した折、しばしばこの眺望に足を止めたと伝えられています。

久栗坂と浅虫の間の奥州街道は、海沿いの道と山越えの道に分かれていました。海沿いの街道は善知鳥崎を回り、奥州街道でも有数の難所でした。このため、山越えの道もあり、浅虫を望む絶景でした。

善知鳥崎 9

善知鳥崎は、奥州街道でも有数の難所でした。波の打ち寄せる岩に板が渡してあり、「善知鳥崎の梯(かけはし)」と呼ばれていました。明治9年(1876)、天皇の巡幸の折、崖を削って道を通し、容易に通れるようになりました。義経を騙って乱を起こした秋田五城目領主・大河兼任が最後の砦とした「たうまのかけはし」は、この善知鳥崎です。



義経が衣川の館で自害し、平泉の藤原氏が滅びた文治5年(1189)の年の瀬、死んだはずの義経が奥州で兵を上げたという知らせが鎌倉を驚かせます。兵を起こした大河兼任は安倍頼時の5代の裔だといひ、初め7000騎を率いて多賀城へ向かいましたが、途中融けた氷を渡りそこで5000の兵を失い、ふたたび秋田と津軽で1万の兵を蓄えて平泉を制圧します。しかし衣川の合戦に破れ、外ヶ浜(津軽半島の陸奥湾側)と糠部(南部地方)の間の「たうまい」(善知鳥崎)の山に立て籠もります。最後は一人落ち延びるところを、文治6年3月、討たれてしまいました。

矢倉山の笹石 10

久栗坂は、『津軽郡中名字』に「根井」という名前で登場する古い村です。ここに矢倉山という小高い森があり、その頂に不動明王が祀られています。麓には観音寺があって、この裏手に重なり合った岩があります。そのかたがが笹に似ていることから、矢倉崎にある入り江を「笹石の浦」ともいいました。その重なり合った岩の下が洞窟のようになっていて通り抜けられることから、「潜坂」(久栗坂)という地名の由来になっています。この地名の言い伝えは、菅江真澄も「つがるのおく」に書いています。



久栗坂稲荷神社 11

久栗坂から浅虫までの奥州街道は、善知鳥崎の梯(かけはし)を渡る海沿いの道と、久栗坂稲荷神社から浅虫八幡宮へ抜ける山越えの道の二手に分かれています。

赤松巨樹 12

全国巨木百選に選ばれた樹齢700年の赤松巨木(全国第2位)は、浅虫森林公園・馬場山にあります。



【奥州街道 浅虫】

浅虫は「津軽郡中名字」にも「麻蒸」と記されている古い温泉です。慈覚大師円仁上人が発見したとか、円光法師法然上人が開いたとかいう伝説があります。由来の名は、布を織る麻を蒸すのに用いていたこと。浅虫の湯・目の湯・大湯・滝の湯などが見え、多くの湯が湧いていたことがわかります。久栗坂と浅虫の間の奥州街道には、海沿いの道と、山越えの道がありました。海沿いの道には有名な「善知鳥崎の梯」があつて、潮が引かないと渡れない難所でした。このため、久栗坂の稲荷神社から浅虫の八幡宮へ抜ける山道がありました。浅虫は街道に開けた古い湯治場ですが、明治二十四年(1891)に東北本線ができてから賑わいだし、大正初期の景気で芸者の出入りする歓楽街となりました。明治時代から第二次世界大戦後にかけて「くじらもち」の店がで、一〇〇人を超える芸妓がいました。高浜虚子などの文人が訪れ、弘前高校時代の太宰治や、棟方志功もしばしばこの温泉を訪れています。

米田甚吉の碑 1

弘前和徳(わとく)町で木綿屋を営んでいた米田甚吉(よねだ・じんきち)が、明治21年(1888)から製塩事業を開始しました。途中、日本鉄道会社の鉄道建設の件で一時休業しましたが、明治30年代には年産約1000石を生産するまでになりました。その後、生産過剰による経営難と日露戦争後の政府による塩の専売方針などによって、明治42年9月に事業は廃止となりました。

浅虫源泉(元の「裸湯」) 2

円仁が恐山を開いたのち巡業中に湯浴みしたという伝説のある「裸湯」は、浅虫温泉のもっとも古い源泉です。浅虫に2つあった共同浴場のひとつ「裸湯」がここにありました。菅江真澄も、ここを訪れています。



浅虫本陣「柳の湯」 3

浅虫の本陣の旅籠は、柳の湯です。ここには、弘前藩主が湯浴みした湯船があります。天明8年(1788)に、飢饉に苦しむ領民を救済するための事業として、この湯船を作らせました。浴槽は地面より低い場所にあり、湯の湧く場所に作られています。

「椿の湯」 4

寛文9年(1668)に開業した浅虫の最初の旅籠。明治9年(1876)の天皇の東北巡幸の折、この宿に泊まりました。「椿の湯」は、

浅虫の源泉のひとつです。また棟方志功が浅虫に滞在したとき、しばしばここに泊まり、その御礼に「板画」や絵を残したため、館内にこの作家のコレクションがあります。



久慈良餅 5

浅虫の名物になっている「くじらもち」は、江戸時代の「古今名物御前菓子秘伝抄」に登場する、れっきとした京菓子です。江戸時代の京の「鯨餅」は、白と黒の2層になった棗物でした。その断面が鯨の脂に良く似ていました。青森県でもっとも早く「くじらもち」の店が出来たのは、鱈ヶ沢です。浅虫「永井元祖久慈良餅本舗」の初代・永井吉兵衛は鱈ヶ沢の廻船問屋に婿入りしたもので、すでに時代は海上の交通から鉄路へと移っており、明治40年(1907)、温泉街として賑わっていた浅虫に移って鯨餅店を開きました。生姜を入れないこと、胡桃を入れること、名前に「久慈良餅」の字を充てたことは、吉兵衛の考案です。この吉兵衛から、浅虫タイプとでもいうべき「久慈良餅」が始まっています。「菊屋もち店」、「森山菓子舗」、永井の分家「永井久慈良餅店」と、浅虫には鯨餅屋が4軒あります。



曹洞宗安養山夢宅寺 6

恐山から巡拝してきた慈覚大師円仁が辻堂を建て、1尺5寸の薬師如来像と6尺大の地藏尊像を刻んで安置した、と伝わっています。本尊は薬師如来で、土地の人は「薬師堂」と呼んでいました。貞享元年のころ(1684)、弘前藩の4代藩

